

願成寺報

令和元年十一月二十六日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二一・五二・九六〇一

報恩講のご案内

春秋のお彼岸に比べて報恩講のお参りが少ないままです。お供物やお飾りにも手間を掛けて準備します。法要は近隣のお寺様が駆けつけて下さり、盛大に勤めます。お斎(食事)も精進ですが豪華に作ります。美味しいです。法話も多彩な方をお願いしていきます。真宗寺院で最も大切な行事です。今年も雅楽を願いました。餅つき会も楽しいです、ご参加下さい。



十二月 四 日(水) 午後一時 餅つき・草取り会

七 日(土) 午後一時半 法要・法話 岡崎市浄泉寺 戸田 栄信 師

午後三時半 お非時(お雑煮)

午後四時 法要・法話 住職

八 日(日) 午前十時 法要・法話 西川 舜優 師

午前十二時 お斎(昼食)

午後一時半 法要・法話 西川 舜優 師

講談のような説話説教②



西川 舜優 師

1980年生まれ 32歳で得度。海外貿易の会社員からバーのオーナーを経て真宗高田派の僧侶になった。異色の経歴を持つ。古典説教の世界に魅せられ、古典説教師に師事する。講談節調の語り口で寺以外でも、祭りでの辻説法・飲食店・演芸場等で精力的に布教を展開している。一昨年、証人絵伝の絵解きをお願いしました。今回は得意なネタで自由にお話いただきます。

お聞き逃しなく!



戸田 栄信 師

お馴染みの恵信先生の息子さん 次世代を担う頼もしい先生は 何を聞き 何を伝えるのか?

お斎(昼食)

お斎も楽しみの一つ 胡麻豆腐は坊守/住職の手作り 今年は上手に出来るかな?



形よりも汗が尊い 餅つき/供物

雅楽・菊理(くくり)

本堂落慶法要からのご縁です 古風な調べで年中最大行事に 華を添えて下さいます



● 正信偈ノート②6・源空章 I

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

本師源空明仏教 憐愍善悪凡夫人

黄色の勤行本の

真宗教証興片州 選択本願弘悪世

四十一ページから

本師・源空は、仏教を明らかにして、善悪の凡夫を憐愍せしむ。真宗の教証を片州に興し、選択本願を悪世に弘む。

〔浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

・源空

親鸞聖人の面授の師匠である法然房源空上人

・憐愍

聖人二十九歳から六年間 直接に教えを頂く

・真宗

ふびんに思い あわれみいたわる

・教証

いのちに纏わる真実の教え 浄土真宗

・片州

往生浄土の教義と救い (教行証の略)

・選択本願

辺境の島国 和国日本のこと

・源空 (法然) 上人

特に凡夫を選んで救い取ろうとした弥陀の願い

七高僧の第七祖。1133年、美作国(現岡山県)の豪族家のひとり

児として生まれる。幼名は勢至丸。九才の時、父が敵対勢力の夜襲にて斬死する。父は「仇討ちを禁じ、己と衆生を救う道を求めよ」と遺言したとされる。勢至丸は寺に預けられた後、比叡山に上る。

十五歳で受戒し、十八歳で師を西塔黒谷の叡空と選び、法然房源空と改名する。天台教学に留まらず余宗をも求道研鑽し「智慧第一

の法然房」と称賛されたが、自身は『戒定慧の器でない』との迷いが晴れず、また悲惨な民の生活を見聞し、衆生と共なる凡夫の救いを経蔵に求め続けた。



1175年、四十三歳になって『観経疏(善導大師著)』に導かれて専修念仏に帰依する。

その後、比叡山を下りて東山吉水に草庵を設けて移り住み、階層や善悪を選ばず、求める人に称名念仏を勧めた。保元・平治の乱以降、戦乱・天災・飢饉・疫病に苦しむ人々は、その人格と信仰の力に感化され、上人の下に集まった。この庶民に浸透する仏教は、伝統仏教の反感を買った。

五十四歳の時、南都北嶺の多数の碩学と称名念仏の教義について対決した(大原問答)。「末法の今、全ての衆生に開かれた教えは弥陀の本願でしかない」との主張に非の打ちどころはなかった。これを機に、朝廷・貴族にも帰依者が広がった。

六十六歳の時、関白・九条兼実の求めにより『選択本願念仏集』を著す。念仏の教えが広まるごとに伝統仏教の弾圧も強くなった。

「延暦寺奏状(1204年)」が天台座主に発せられ、「興福寺奏状(1205年)」が朝廷に訴えられた。

七十二歳の時、叡山の訴えに、門下の素行を正す「七箇条制誡」で対応する。しかし七十四歳の時、後鳥羽上皇の逆鱗に触れる事件が起こり、「専修念仏の停止」の宣旨が下り、門弟四人は死罪、上人は土佐への配流と決まった(承元の法難)。

七十五歳から都を離れたが、民衆に念仏を勧める姿は変わらなかった。七十九歳で帰洛を許されたが、その後二ヶ月余りで入滅。弟子の求めに応じて書かれた「一枚起請文」が遺訓となった。

主な著作

『選択集』

正式には「選択本願念仏集」で十六章からなる

仏教を、聖道門／浄土門・正行／雑行・正業／助業、

と分析し、称名念仏を勝法と選んでいく書物

曇鸞／道綽／善導からの師資相承と示される

大経四十八願の内特に第十八願を王本願と選ぶ

創作・源空上人の臨終

旧暦正月下旬、春とはいへ洛東大谷は例年の様に底冷えがしていた。弟子達は師の身体を心配したが、上人にはむしろ懐かしかった。寒いから暖かい。弟子達は本当に良くしてくれている。上人は暫し念仏の口を休めて思いに耽った。

美作の国であれば、もっと身体は楽であつただらう。けれど、念仏申す人々の中こそ故郷であり、帰るべき場所であつた。その弟子達は念仏のいのちを真直ぐに受け止めてくれたらうか：

先日は三尺の仏像を持ち込んできた。五色の紐も手配したのでらう。それは儀式法要の作法だぞ。この老いぼれの臨終には無用の事だ。余計な事ではあつたが、善を成そうとする心根を有難く受け止めた。

我らは既に弥陀と結縁し、観音勢至菩薩聖衆に囲まれている。「そなた等も聖衆」と差すべき指は、虚しく宙を漂い布団に落ちた。食が細くて久しい八十歳の老人には、そんな力も残っていないかつた。

既に遺訓は書いた、残すべきは最後の念仏の姿のみと覚悟した。懐かしい浄土に還るのに不安はない。

一切衆生 平等往生。

ただ父の遺志に適つたかどうか気が懸りだつた。

都を覆う奇瑞の紫雲に人々は驚き、慕う人々が続々と集まつた。

光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨。

あわれなることかな： どうか肝に銘じて欲しい：

その美しい光に照らされているそなた達こそ奇瑞なのだ。

もう少し共に居りたいと思うと念仏の声が自ずと昂まつた。

建暦二年一月二十五日正午、日差しの中で時は至つていた。

苦難の縁も弥陀の計らいと嫌わず、念仏に包み込んで過ごした生涯。その上人の往生は、人々の念仏に包まれて、眠るように遂げられた。

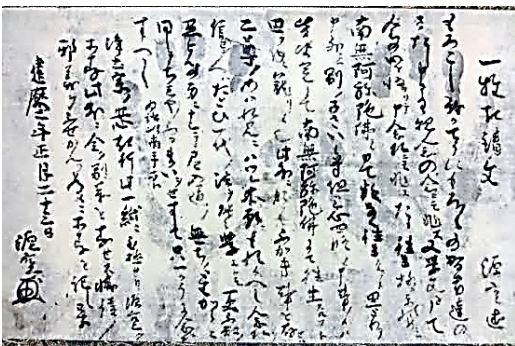
〈西方指南抄、他より創作〉

一枚起請文 源空上人の遺訓

唐土我朝にもろもろの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず。又学問をして念のこころを悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいに往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず。ただし三心四修と申すことの候うは、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにもり候うなり。この外に奥ふかき事を存せば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし。証の為に両手印をもつてす。

浄土宗の安心起行この一紙に至極せり。源空が所存、この外に全く別義を存せず、滅後の邪義をふせがために所存をしるし畢んぬ。

建暦二年正月二十三日 源空（花押）



上人の往生二日前の作文であり、筆致と両手の印が残っている。念仏は、自らの思いや納得した道理を建てて称えるのではなく、自らの憤り／怨み／迷い／後悔／悲しみ等の思いを差置いて、自分を空しくするように称えることが大事である。念仏申せば必ず、弥陀の計らいが暖かく／懐かしく／有難く感じられてくる筈だ。

「全ては大悲の中」とのお示しだと思ふ。

行事予定（令和二年）

スケジュール帳に転記して、是非、ご予定下さい

一月一日（水・祝）	修正会 お正月のお勤めです 簡単なお節を準備します 午前十一時～
三月二十日（金・祝）	春季彼岸・永代経法会（成田屋紫蝶師） 落語と法話で楽しく過ごします お非時（昼食）あり 午前十時～
八月十五日（土）	お盆・歡喜絵（住職） 法要・法話で亡き人を偲びます 軽食・花火あり 午後六時～
九月二十日（日・祝）	秋季彼岸・永代経法会（戸田恵信師） お馴染みの先生の情熱的な法話です お非時（昼食）あり 午前十時～
十一月三日（火・祝）	本山納骨堂法会・団体参拝 本山へ貸切りバスにて団体参拝します 午前六時半ごろ集合
十二月五日（土）	報恩講 御開山聖人御恩に報いる法会です お非時（昼食）あり 一日目 午後一時半～ 二日目 午前十時～
十二月六日（日）	
二〇二〇年十二月	月例会 毎月一日 午後二時～ 日時変更の場合があります 寺にご確認下さい

後記

○ それぞれのモノサシ

メイプル(犬)は、起床(食事)、散歩の時間に厳しく、私が遅れると催促し、お母さんのようです。けれど裸でいても恥ずかしくありません。彼女のモノサシはそんな風に出てきます。

法然上人は若い頃から「智慧第一」と讃えられていましたが、自身は「悪業煩惱の鎖が断てない」と嘆き「下機の行法」を求めてご苦勞されました。世間のモノサシを疑い、仏のモノサシに合う生き方を探されたのだと思います。

「能力は高い方が良い」「何でも自由に出来たら幸せ」は当たり前のようですが、「出来ないから不幸」は、疑う余地がありそうです。出来ないから助けてもらえる。「出来ない」を通して仲間を見出します。そして、仲間の為になることをしたくなる。「何でも自由」は逆に孤独なのかもしれません。

何れの行も及び難き法然上人は、仏のモノサシを善導大師の文に学ばれ、弥陀の本願に順じる生き方を実践されました。

救われる事で仲間を見出し、救われた姿で救っていく…

○ 大らかな生き方

それぞれの善がぶつかってギスギスした時代を、法然上人は悪をも包み込んで大らかに生き抜かれました。東大寺や興福寺を焼亡した平重衡が源氏に捉えられて刑死しますが、罪に怯えて慚愧した時、上人は親しく受戒し、優しく念仏を勧められました。

人間のモノサシに捉われない大らかさは、弥陀の本願と功德、五祖伝来の念仏の歴史への信頼に支えられていました。

迷いを縁に仲間を見出し、念仏に救われ合って過ごすべし。大らかさは仏のモノサシの指示だと思います。

メイプルは、必ずしも良い主人でない私に、透きとおった眼で尻尾を振ります。独りでは生きられないと知り、私を家族と信頼し、いのちを預けてくれます。私はそんな彼女に癒されて、励まされながら、自分のモノサシを点検したりしています。